

5 月例会レジュメ

(H21. 5/15(金)18:00～20:30開催)※

場所 技術士会草手ビル5階 AB 会議室

参加者 35名(講師を含む)

1. 「原子力における倫理の意義と技術士の役割」 講演者:大場恭子氏(金沢工業大学)

技術が不可欠な現代社会は、技術の正の側面(便益)を拡大しつつ負の側面をいかに減らすかが大きな課題である。技術者倫理は、その負の側面を減らす一環であるが、技術者自身が誇りを持って仕事を遂行するためのものでもある。

本講演では、大場氏が原子力との関わりを持った経歴から始まり、学会倫理委員会活動を通じて原子力業界の倫理の動向を見てきた立場から聴講者参加方式で講演を進めた。

大場氏は「“原子力”技術」の特徴は、他の商品とは異なり、一般の人から技術が見えにくいため、原子力従事者自身が最も「見える」「感じる」原子力であるという認識が必要であると主張された。さらに、社会が最も原子力・放射線部門の技術士に期待するのは、組織の論理に埋没しない専門家として、リスクコミュニケーションの分野で重要な役割を担うことであると締めくくった。



2. 討論「原子力の実務において技術者倫理を浸透・定着させるには」

—第36回技術士全国大会の第5分科会「技術者の倫理」事前討論—

進行役:桑江良明氏 日本技術士会 原子力放射線部会幹事(電源開発株式会社)

「原子力業界では、『倫理』から、組織全体の『安全文化』に関心が移った。」との指摘がある*が、業界内部の技術士としてこれをどのように捉えるか。同じ時期(1998～2005)には、原子力学会では倫理規程が制定され、また、「倫理」を標榜する技術士資格には原子力・放射線部門が誕生している。業界内に指摘のような兆候が見られるとすれば何が欠けているのか?

以上の問題意識のもとに原子力実務における技術者倫理の浸透・定着に向けて、我われ原子力・放射線部門の技術士(その大半が組織内技術士)は何をなすべきかについて、大場講師も交え自由討論を行った。

討論は、敢えて意見集約を目的としなかったため、所属組織や立場、経験の違いから「技術者倫理」や「安全文化」に関する様々な意見が出た。また、技術者倫理の浸透に向けた具体的取り組み事例の紹介や提案もあった。そして、討論後のアンケートでは「時間が足りない」「同じテーマでもう一度」「身近で切実なテーマを選び、組織横断的なケーススタディを」などの感想や提案があった。



*) 杉本泰治氏講演「原子力業の倫理とコンプライアンス」(2009.3.23, (社)日本技術士会主催シンポジウム「企業と技術者の倫理とコンプライアンス」)